

日本古典全書

井原西鶴集 一

監修

佐佐木信綱
柳田國男
山田孝雄
和辻哲郎

新村出
津田左右吉

井原西鶴集

一

朝日新聞社
刊
日本古典全書

日本古典全書

「井原西鶴集」一 藤村作校註

昭和二十四年九月三十日初版發行

昭和三十一年四月三十日第五版發行

印刷所 明善印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 二八〇圓

目次

解 説	三
-----	---

一、西 鶴	三
-------	---

二、好色一代男	一三
---------	----

三、好色五人女	一七
---------	----

四、文 體	二三
-------	----

五、西鶴を生んだ社會	二四
------------	----

凡 例	三三
-----	----

好色一代男

卷 一	三九
-----	----

目 録	四三
けた所が戀のはじまり	四四
はづかしながら文言葉	四五
人には見せぬ所	四五

卷

二

袖の時雨は關るがさいはい……………哭
尋てきく程ちきり……………三

煩惱の垢かき……………番
別れは當座はらひ……………美

六

卷

三

目録……………六
はにふの魔道具……………三
髪きりても拾られぬ世……………五
女はおもはくの外……………七

誓紙のうるし判……………七
旅のでき心……………七
出家にならねばならす……………七
うら屋も住所……………八

八

卷

四

目録……………八
戀のすて銀……………八
袖の海の看寶……………八
是非もらひ着物……………七

一夜の枕物ぐるひ……………七
集禮は五奴の外……………七
木綿布子もかりの世……………七
口舌の事ふれ……………七

一〇

目録……………一〇
因果の關守……………一〇
形見の水櫛……………一七

夢の太刀風……………一〇
替つた物は男傾城……………一三
霊のつり狐……………一六

目次三月.....二八 火神鳴の國がくれ.....三三

卷五.....三三

目 録.....三五 命捨ての光物.....二四

後は様つけて呼.....二六 一日かして何程が物ぞ.....二七

ねがひの搔餅.....二九 雲流の男を見しらぬ.....二九

欲の世中には又.....三三 今爰へ尻が出物.....三三

卷六.....三七

目 録.....三九 寢覺の榮好.....二七

喰さして袖の橘.....四一 詠は初姿.....二八

身は火にくばるとも.....四三 匂ひはかけ物.....二九

心中箱.....四四 全盛歌書羽織.....二九

卷七.....三七

目 録.....四一 さす盃は百二十里.....二八

其面影は雪むかし.....四三 諸分の日帳.....二九

未社らく遊び.....四五 口添て酒輕籠.....二九

人のしらぬわたくし銀.....四六 新町の夕暮嶋原の曙.....二九

卷八 一七

目録 一七

らく寝の車 一八

情のかけろく 二〇

床の寶道具 二〇

歌 二二

好色五人女

卷一 姿姫路清十郎物語 二五

目録 二五

戀は闇夜を畫の國 二七

太鼓による獅子舞 三三

くけ帶よりあらはるゝ女 二九

狀箱は宿に置て來た男 三五

卷二 情を入し樽屋物かたり 三二

目録 三二

戀に泣輪の井戸替 三三

京の水もらさぬ中忍びてあひ釘 三九

踊はくづれ桶夜更て化物 三五

こけらは胸の瀬付さら世帯 四四

卷三 中段に見る曆屋物語 三五

木屑の杉やうじ一寸先の命 四八

目 録……………三

人をはめたる湖……………三六

妻の關守……………三七

小判しらぬ休み茶屋……………三九

してやられた枕の夢……………三九

身の上の立聞……………三九

卷四 戀草からけし八百屋物語……………三七

目 録……………三七

雪の夜の情宿……………三八

大節季はおもひの闇……………三七

世に見をさめの櫻……………三八

蟲出しの神鳴もふんどしかきたる君さま……………三七

様子あつての俄坊主……………三八

卷五 戀の山源五兵衛物語……………三九

目 録……………三九

衆道は兩の手に散花……………三九

連吹の笛竹息の哀や……………三九

情はあちらこちらの違ひ……………三九

もろきは命の鳥さし……………三九

金銀も持あまつて迷惑……………三九

井
原
西
鶴
集
一

藤
村
作

解 說

一、西 鶴

井原西鶴の傳記は資料の極めて乏しいために、立派に纏まつたものはない。斷片的なものを集めて、その生涯を纏げに纏め舉げてゐるに過ぎない。

先づ井原西鶴とは何人であるか。これに關して昭和四年一月發行の國語と國文學、新資料の研究と題する特輯號の中に、余は

今年春の頃とおぼえてゐる、友人笹野堅君が訪れられて、井原西鶴の實名は既に世に知られてゐるかと問はれた。余は嘗て聞いたことはないと答へると、それではまだ多く世に知られてゐないであらうといつて、日本藝林叢書第八卷見聞談叢の一節を示された。余は一讀して、その注意すべき珍しい新資料であると考へたから、君に進んで考證研究をなして世に發表されんことを請うたが、謙遜な君は然るべくと發表のことを余に譲られた。

ので、「一先づ筆を執つて單に學界に報告することとした」といつて、見聞談叢の左の一文を掲げた。

貞享元祿の頃、攝津の大坂に、平山藤五といふ町人あり、有徳なるものなれるか、妻もはやく死し、一女あれども盲目、それも死せり、名跡を手代にゆつりて、僧ともならず、世間を自由にくらし、行脚同事にて頭陀をかけ半年程諸方を巡りては宿へ歸り、甚俳諧をこのみ、一品をしたひ、後には又流義も自己の流義になりたる、西鶴とあらため、永代藏又は西ノ海、又は世上四民雛形なといふ書を、作れるものなり、世間の吉凶悔吝患難予奪の氣味、よくあしらひ、人情にさつく生れつきたるもの也、又老莊ともみえず、別種のいき形とみゆ、黒田侯歸國の時、大坂の御屋敷へ、大阪にて召して、次にてはなし聞き給ひ、世上へ出し、使番聞番留守居の役に云付侍らば、かゆき所へ手のとくやうにあらん人からと稱し給ふよし、云々(以下略)

なほ余はこれに關して、

この新資料について、余の先づ喜ぶ所は、見聞談叢の著者が、その人物に於て相當信頼をなし得べき人であり、またその記録された年代が西鶴の在世時に近いことである。この二點において本資料は相當に敬意をもつて取扱はるべきものであらう。

この新資料に據れば、西鶴の實名の平山藤五であつたことが知られる。井原といふのが苗字でなかつたとすれば、井原西鶴は雅號のやうなものであらうか。次ぎに彼を武家の出身であらうかといつた疑

も、單に疑に止つて、大阪の町人であつたことになる。作品から察すると、いかにもこれが眞實らしい。元祿太平記が彼を貧乏者と傳へて、誰も疑ふものはなかつたやうであるが、この資料に依ると、もと相當富んでゐた家に生れたが、後その家を手代に譲つて、俳諧や浮世草子などに筆を執つて、専ら世を自由に暮らしたといふから、生得の貧乏者ではなかつたこととなる。この點も彼の作から考へ、これまで知られてゐた經歷と照らし見て興味多く思はれる。

獨身者であつたらしいといふ想像はよく當つてゐたこととなるが、しかし嘗ては妻も持つたが、夙く死なれてしまひ、一女子も盲目の上に早世してからは、全く獨身であつたと見える。一目玉鐙の著述のあることや、好色本その他の作が三都ばかりでなく廣く地方にわたつて材を得てゐる趣から察して、彼が旅行家であつたといふ想像もこれに依つて確められるわけである。一年の半分も旅に出てゐたといふことはいかにもさうであつたらしく思はれる。ここに疑問となり、その解決の望ましいことは、著作についてこの資料の傳へる所である。永代藏はいいが、西の海、世上四民雛形といふのは永代藏の別名の意でいふのか、文が不明確であるが、今日傳へてゐる日本永代藏の二種の本には新長者教の別名を傳へて、西の海とも世上四民雛形とも傳へてゐない。永代藏の外にこの二書があるの意かとも取られるが、それにしても、余の寡聞まだかかる著作を見たことなく、またかかるもののあることを傳へたこともない。偏へに特志家の研究示教を俟つのである。

と記して置いた。爾來將に二十年に垂んとしてゐる。この間に世の西鶴に關する研究も進んだが、この資料の所傳を否定すべき新發見もなく、學者は寧ろこの資料以上に彼の素性などを知るに價値ある資料は、今迄のところないと諦めてゐるやうである。

さうすると、西鶴は平山藤五と稱した、大阪町人の出で、もと相當の家に生まれたが、(其角の句兄弟に「されば難波江に生れて住よしのくまなき月をめ云々」とある。)後家業を手代に讓つて、自分は自由の境遇に入つた人であり、妻子もあつたが、妻は彼に先だつて死に、一女子は盲目の上に早世したのである。自由の身となつてから、所々の旅行に日を送つた。文藝の生活に入つたのは、十五六歳から俳諧に親しんだのを皮切りに、四十歳を超えて浮世草子の作に従つた。有名な好色一代男は實に天和二年四十一歳の年出版されたのである。

生歿の年は彼の遺作の一たる西鶴置土産卷頭に載せた辭世の發句の日附が基礎になつて、寛永十九年生まれで、元祿六年に死歿したと知られる。この辭世句の日附は「元祿六年八月十日五十二歳」とあるが、この八月十日といふのは、辭世句を詠んだ日のことか、死んだ日のことか、この文だけでは明瞭を缺くのである。大阪東區上本町四丁目誓願寺に在る墓碑には「元祿六年癸酉八月十日」とあつて、右と全く一致してゐるから疑ひはないやうなもの、唯一つ遺作の一である「俗つれ／＼」の卷頭門人北條團水の序文に

花の春もみちの秋去て、さためなき時。雨。月のはしめ此俗つれ／＼をなかきかたみにして、松壽西鶴のかきりある今はの時云々

とあるので、八月十日は辭世句の日附で、それから中一ヶ月病褥にあつて十月に死んだと解することも、常識上妥當であるから、一概にはいひ難いやうな氣もする。余も誓願寺の墓石が元祿時代のままのものとしては、餘りに磨滅破損のないので、専門的な理學者の意見を徴して見たいと考へてゐる。

大矢數に「予俳諧に入て二十五年晝夜心をつくし云々」とあり、この大矢數は延寶八年の出版であるから、十五歳の少年期から俳諧に入つたことは確實であり、爾來生涯斯道に盡瘁したことはその俳諧關係著作の出版のほぼ晩年まで通じてなされてゐることとわかる。俳人としては、彼は談林派に屬し、西山宗因を師とした。その發句の如きは談林派の發句が今日すでに定評があつて、高い文藝價值を認められないやうに、彼の句も不朽に傳はるべきものはないが、その連句にあつては、多數吟の驍將として、自他共にゆるしたもののやうである。彼は數度矢數俳諧を催して、多數吟の競争を行つた。その中で特に著しいのは最後の興行で、一日一夜の獨吟實に二萬三千五百句に達して、世人を驚倒せしめてゐる。

このことは餘りに莫大な句數なので、後世から眞偽の疑はれるところもあつたが、置土産卷頭の追善發句中に如貞の「月に盡ぬ世かたりや二萬三千句」があり、其角が五元集に、

住吉にて西鶴が矢數俳諧せし時に後見たのみければ

驥の歩み二萬句の蠅あふぎけり

ともあり、さらに寶永二年西鶴十三回忌追善の「心葉」の中に北條團水の記した文に、

近比井原西鶴と云者あり、攝の浪速の産なり。西山梅花翁の門より出で、俳諧を以て名を天下に飛す。……西鶴一日獨吟の千句を誦して、後四千句を獨吟して、梓行世に蔓る。これより多武峯の紀子、仙台の三千風、才鷹、一晶等各數千句或は一万句餘まで獨吟したりけり。世に矢數俳諧と稱する濫觴は西鶴に始りける。

さる程に貞享元年六月五日攝の住吉の神前に於て西鶴亦一日一夜の獨吟二万三千五百句を唱て、然も緒上に顯はす。……これより自號して二万翁と呼。見聞の徒神を以て稱せずと云ことなし。……其日席にあるもの高瀧似船、前川由平、岡西惟中……、此日江府其角來り合せて、蠅拂の句を吐く。遠近の輩神前に群り觀ること堵の如し。

とあるのは、何よりも動かし難い事實の證據である。蠅拂の句といふのは、前掲五元集中の句を指してゐること疑ひない。既にこの事實を肯定する以上、この超凡の事蹟を成し遂げた能力を推定することは出来るはずである。そもそも談林連句の附合は聯想を基礎とすることの最も著しいものであり、また西鶴らの連句の一特徴は卑近な實生活中に材を取ることであるから、次ぎの二つの能力を推定することは決して不當であるまい。その一は彼は人生に驚くべき豊富な知識を有した非凡な記憶力の持主であつたこと。さう

してその豊富な知識を、連句の中に自由自在に驅使し得る超凡な聯想力を有してゐたことである。この二つの能力の超凡なことによつて、彼は普通の人の神技視し、不可能視したことを成し遂げ得たに相違ないのである。これは獨り彼の俳人としての特徴を考へるべき要諦たるのみならず、また彼の浮世草子の特徴を考へるためにも甚だ有益な條件たるべきものである。

彼の日常生活については、行脚旅行に一年の一半を送つてゐたことを、見聞談叢は傳へてゐる。それを信ずるとしても、なほ餘の一半はどうしてゐたであらう。元祿太平記は彼の傳記閱歷を知るに信賴すべき資料を與へてくれる書とはし難いが、それでも

此の道の作者西鶴といふ男出生して、春の花の朝秋の月の夜毎に伊丹諸白を引かけ、二人機嫌の酔興の餘り、寄太鼓を叩き、戀の湊を引舟に乗つて、色道のよしあしを悉くおしはかり

とあるのは、好色本の作者としてかうした方面の生活を有した人であることを肯定させる一資料たるに足るやうである。また實際かうした生活の體驗なしに、彼の好色本のやうなものの書けるといふことは想像し難いことである。併しそれも單に遊蕩好色の耽溺者であつたことをいふのではない。前にも引いた心葉の中の湖梅といふ人の句の詞書に

井原入道西鶴は風流の翁にて机に蘭麝を這し、釣舟に四季のものを咲せ、哥行引曲をさととりて、俳諧の通達なる事浦山の賤の子も乳房を離してこれを訪ふ。下戸なれば飲酒の苦をのがれて、美食を貯へ